二〇二三年度　高校国語（一回）

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある）

気がつくと、Ｎｅｔｆｌｉｘ（ネットフリックス）をパソコンで観る際に１・５倍速で観られるようになっていた。セリフは早口になるが、ちゃんと聞き取れる。字幕も出る。

かつてＮｅｔｆｌｉｘにこの機能はなかった。

調べると、米Ｎｅｔｆｌｉｘ社は２０１９年８月に、Ａｎｄｒｏｉｄのスマホやタブレットで視聴する際に再生速度を選択できる機能を搭載。その後ｉＯＳ端末やウェブにも導入が進み、順次各国が対応していった。２０２２年２月現在の日本では、再生速度を０・５倍、０・75倍、１倍（標準）、１・25倍、１・５倍で選べる。

再生画面には他に「10秒送り」「10秒戻し」ボタンもある。クリックもしくはタップすれば、一瞬で10秒後・10秒前に飛ぶ（スキップする）。ＴＶモニタでの視聴時に倍速視聴はできないが、対応するリモコンのキー操作で10秒送り、10秒戻しが可能。なお、Ｎｅｔｆｌｉｘと双璧をなす動画配信サービス、Ａｍａｚｏｎプライム・ビデオにも、10秒送り・10秒戻し機能がある。

視聴デバイスやＯＳによって多少異なるが、倍速視聴機能や10秒スキップ機能が標準搭載されている動画配信サービスは数多い。ＹｏｕＴｕｂｅの場合、再生速度の幅を０・25倍から２倍まで０・25刻みで細かく設定でき、10秒（５秒）送り・10秒（５秒）戻しも可能。スマホならタップ動作で、ＰＣならショートカットキーを(a)クシすれば自在に操作できる。

聞き取れなかったセリフをもう一度聞くために10秒戻しをするのは、わかる。しかし初見の映像作品を10秒飛ばしで観るとは、あるいは倍速視聴するとは、一体どういうことなのか。

（中略）

倍速視聴・10秒飛ばしする人が追及しているのは、時間コスパだ。これは昨今、若者たちの間で「タイパ」あるいは「タイムパ」と呼ばれている。「タイムパフォーマンス」の略である。①

参考までに、Google Trendsで「コスパ」という単語の日本国内における検索人気度を調べると、２０１０年から２０１３年頃までは10～20あたりを推移していたところ、その後右肩上がりとなり、２０１９年以降はほぼ90を下ることがなくなった。

フォロワー数十万人を誇る、あるビジネス系インフルエンサーが、Ｔｗｉｔｔｅｒで映画の倍速視聴を公言したときも、そこについたリプには「コスパが良くなっていい」といった好意的な意見が多かった。

［ア］彼らは映画やドラマの視聴を、速読のようなものと捉えている。速読と同じく、訓練によって映像作品を速く、効率的に体験できると考えている。

［イ］ビジネス書ならともかく、なぜ映像作品にまでコスパを求めるのか。なぜそこまでして効率を求めるのか。②「話題作についていきたい」だけでは、動機としてはやや不足に思える。

［ウ］若年層リサーチや大学の講義、就活イベントなどで現役大学生と触れ合う機会が多いという、博報堂ＤＹメディアパートナーズ メディア環境研究所・森永真弓氏の言葉にそのヒントがあった。

［エ］森永氏によれば、大学生の彼らは趣味や娯楽について、てっとり早く、短時間で、「何かをモノにしたい」「何かのエキスパートになりたい」と思っている。彼らはオタクに〝憧れている〟のだそうだ。

ところが、彼らは［Ａ］を嫌う。膨大な時間を費やして何百本、何千本もの作品を観て、読んで、たくさんのハズレを掴まされて、そのなかで鑑賞力が磨かれ、博識になり、やがて生涯の傑作に出会い、かつその分野のエキスパートになる――というプロセスを、決して踏みたがらない。

彼らは、「観ておくべき重要作品を、リストにして教えてくれ」と言う。彼らは［Ｂ］を探す。なぜなら、駄作を観ている時間は彼らにとって無駄だから。無駄な時間をすごすこと、つまり時間コスパが悪いことを、とても恐れているから。

彼らはこれを「タイパが悪い」と形容する。

無駄は、悪。コスパこそ、正義。

「何者かになりたい」人たちが門を叩くある種のオンラインサロンには、そういう考えの人たちが集っている。このサロンに入り、影響力のある人とつながって、インスタントに何か一発当てたい。(b)キャッコウを浴びたい。バズりたい。そんな一発逆転を狙う人たちであふれている。「これさえ実行しておけば成功する、魔法の裏技」「この人とつながったら、成り上がれる」、そんな秘密のバックドア、ゲームで言うところの〝チート〟（cheat／ゲームのデータやプログラムを不正に改変してキャラクターの能力をアップさせたり、アイテムやお金を増やしたりする）を彼らは日々探している。いわばライフハックの一形態だが、cheatの元々の意味は「いかさま」「不正行為」「詐欺」だ。

今の世情が、「コツコツやっていても必ずしも報われない社会だから、仕方がない」という理屈は、わかる。ただ、それを映像作品にまで求めるのか。

否、彼らは映像作品と呼ばない。「コンテンツ」と呼ぶ。

映画やドラマといった映像作品を含むさまざまなメディアの娯楽を「コンテンツ」と総称するようになったのは、いつ頃からだったか。こうなると、「作品を鑑賞する」よりも「コンテンツを消費する」と言ったほうが、据わりはよくなる。

二〇二三年度　高校国語（一回）

ここで、言葉の定義を明確にしておこう。

「鑑賞」は、その行為自体を目的とする。描かれているモチーフやテーマが崇高か否か、芸術性が高いか低いかは問題ではない。ただ作品に触れること、味わうこと、没頭すること。それそのものが［③］的に喜び・悦びの大半を構成している場合、これを鑑賞と呼ぶことにする。

対する「消費」という行為には、別の実利的な目的が設定されている。映像作品で言うなら、「観たことで世の中の話題についていける」「他者とのコミュニケーションが捗る」の類いだ。

食事にたとえるなら、「鑑賞」は食事自体を楽しむこと。「消費」は栄養を計画的に摂るため、あるいは、想定した筋肉美を手に入れるという実利的な目的を達成するために食事をすることだ。

「鑑賞」に紐づく「作品」という呼称と、「消費」に紐づく「コンテンツ」という呼称の違いは〝量〟の物差しを当てるか、当てないかだ。

content（コンテンツ）が「内容物」や「容量」の意味であること、新聞などがいまだに「コンテンツ（情報の中身）」などと説明するように、また「コンテンツ」が電子媒体上の情報や制作物を指し示すことを皮切りに言葉として(c)シントウした経緯からして、「コンテンツ」という呼び方には、数値化できる量（データサイズや視聴に必要な時間）に換算して実体を把握しようという意志が、最初から織り込まれている。それゆえ、「短時間」で「大量」に消費できることで得られる快感が、視聴満足度に組み込まれうるのだ。

しかし「作品」は〝量〟を超越する。〝量〟の物差しを拒否する。鑑賞に要する時間と得られる体験を、④即物的な費用対効果で考えたりはしない。鑑賞後何年も経ってから、まるで時限爆弾のようにインスピレーションや啓示が爆発することもある。「実利的」「有用性」を求める意志が、高い優先度では組み込まれていない。「作品」の良し悪しの基準をあえて設定するなら、「鑑賞者の人生に対する影響度」とでも言うべきものになるだろう。それは［⑤］できず、他の鑑賞者にまったく同じ影響を及ぼすことはない、という意味において、再現性も(d)カイムだ。

ゆえに当然ながら、ある映像作品が視聴者にとってどういう存在かによって、「コンテンツ」と呼ばれたり、「作品」と呼ばれたりする。どういう視聴態度を取るかによって⑥「消費」なのか「鑑賞」なのかが異なってくる。新聞の価値を、食器の包み紙や廃品回収でのキロ単位引き取り額で測る人もいれば、世の中を知るための情報源と捉える人もいる、ということだ。

たしかに「消費」なら、10秒飛ばしでも倍速でも構わないだろう。それは、ファストフードの機械的な早食いや、咀嚼を省略した食物の流し込みと変わらない。目的はカロリー摂取だ。⑦もはや食事ですらない。コンテンツを「摂取する」とはよく言ったものだ。

（稲田豊史『映画を早送りで観る人たち　ファスト映画・ネタバレ――コンテンツ消費の現在形』による）

問一　二重傍線部(a)「クシ」、(b)「キャッコウ」、(c)「シントウ」、(d)「カイム」のカタカナを漢字にしなさい。

問二　傍線部①「参考までに～なくなった。」とあるが、引用元の文章にはこの一文に次のような注釈が付いている。注釈の内容も含め、この部分の説明として最も適当なものを後から選び、記号で答えなさい。

【注釈】
以下、Google Trendsにおける説明の抜粋：「数値は、特定の地域と期間について、グラフ上の最高値を基準として検索インタレストを相対的に表したものです。１００の場合はそのキーワードの人気度が最も高いことを示し、50の場合は人気度が半分であることを示します」。なお２０２０年１月から２０２２年１月までの期間で「コスパ」が数値「１００」を記録したのは２０２０年１月と２０２１年５月。

ア　２０１９年に「９０」を超えた検索人気度は、２０２１年５月まで、９０台の数値を維持し続けた。
イ　２０１３年以降、検索人気度は上昇していき、２０２０年１月から２年間をかけて最高値に達した。
ウ　２０１０年から２０１３年の検索人気度は、最高値の約１０パーセントから２０パーセントである。
エ　２０２１年５月の半分の検索人気度であった場合、その年月の検索人気度の数値は「４５」となる。

問三　傍線部②「『話題作についていきたい』だけでは、動機としてはやや不足に思える」とあるが、筆者が述べている「映像作品にコスパを求める動機」を説明しなさい。

問四　空欄［ア］～［エ］のいずれかには接続詞の「しかし」が入る。最も適当な場所はどこか。記号で答えなさい。

問五　空欄［A］・［B］にあてはまる語の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　A　裏道　B　抜け道　　イ　A　寄り道　B　坂道
ウ　A　一本道　B　分かれ道　　エ　A　回り道　B　近道

問六　空欄［③］にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　独立　　イ　実利　　ウ　内面　　エ　感覚

二〇二三年度　高校国語（一回）

問七　傍線部④「即物的な費用対効果」とはどういうことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア　何年も経ってから、急にインスピレーションが働くこと。
イ　短い時間でより多くの量を消費し、その快感を得ること。
ウ　有用性を求める意志が、高い優先度で組み込まれたもの。
エ　「鑑賞者の人生に対する影響度」という良し悪しの基準。

問八　空欄［　⑤　］にあてはまる言葉を本文中から三字で抜き出して答えなさい。

問九　傍線部⑥『消費』なのか『鑑賞』なのか」とあるが、次の中から、本文における「鑑賞」にあたるものを二つ選び、記号で答えなさい。
ア　歌詞の意味を考えながら、音楽を聴く。
イ　入試対策として、たくさん新聞を読む。
ウ　スターバックスで好きなコーヒーを味わう。
エ　ＳＮＳに投稿したいので、新作アニメを観る。
オ　ニュースのまとめサイトを毎朝チェックする。

問十　傍線部⑦「もはや食事ですらない」とあるが、なぜそう言えるのか、四十字以内で説明しなさい。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（本文には一部改めたところがある）

新しい年になって三日目、朝から続々と親戚が詰めかける実家を抜け出して、ぼくはミツザワ書店に向かった。財布には盗んだ本の代金を入れ、手にした茶封筒には自分の本を入れて。

十六歳のあの日以来避け続けていたから、ミツザワ書店のある商店街を歩くのは十一年ぶりだった。実家の近辺もそうだが、あのころと比べて商店街もずいぶん様変わりした。新築マンションが増え、商店街も少しは盛り返したのか、まだ三が日だというのに閉まっているシャッターは少ない。貸しビデオ屋もコンビニエンスストアもファミリーレストランもある。チェーンの居酒屋も、ゲームショップもあった。かといって、にぎわっているかと言えばそうでもなく、なぜかがらんとした雰囲気は変わらず(a)漂っている。

正月の空は高く、澄んでいる。子どもたちが薄い影を引きずりながら、ゲームショップに駆けこんでいく。煎餅屋は携帯ショップに変わっていた。肉屋は以前と同じ位置にあったが閉まっていた。

①ミツザワ書店が近づくに連れどきどきしてくる。シャッターがあいかわらず閉まっているまごころ洋裁店を過ぎ、ハートクリーニングを過ぎ、店先にがちゃがちゃを並べた駄菓子屋を過ぎ、やがてミツザワ書店の看板が見えてくる。すすけて色あせた、黄色地に赤い文字。ああ、あった。なくなっていなかった。自分でも驚くほど安堵していた。

以前とまったく同じ場所にあるミツザワ書店は、シャッターが閉まっていた。そういえば、シャッターの閉ざされたミツザワ書店をぼくは見たことがなかった。ほとんど眠ったような商店街だったが、ミツザワ書店はいつだって開いていたのだ。

三が日だからか。明日には開店するのか。黒ずんだシャッターの前に立ち、ぼくは考えを巡らせる。着物姿の女の子たちがぼくの背後を通りすぎていく。彼女たちの手にした破魔矢の鈴が、ア ちりちりと鳴る。

東京に帰るのは明日の午後だから、明日の朝にまたきてみようか、そう思う一方で、今帰ったら［　②　］ような気もした。

ずいぶん長いあいだぼくはそこに立ち尽くしていたが、思いきって店の裏側にまわった。店の裏側が住居になっていることは前々から知っていた。店の裏手の門についたインターホンを鳴らしてみる。十歳かそこらのころ、住宅街をピンポンダッシュして走りまわったような(b)高揚と緊張を覚える。

返答はない。もう一度押す。門の内側の申し訳程度の庭を、かつてミツザワ書店の店内を眺めたように見渡した。実際庭はちいさな書店内と同じく、雑然としていた。雑草が生い茂り、白いちいさな花が咲き、細いぐみの木や、背の高い柿の木が好き勝手にのびていた。

ドアがゆっくりと開き、ぼくはあわてて視線を戻す。てっきりあのおばあさんがあらわれると思っていたのだが、ドアから顔をのぞかせているのはずいぶん若い女の人だった。怪訝そうな目でぼくを見ている。

「あ、あの、以前こちらでよく買いものをしていた者なんですが」ぼくは急いで自己紹介をした。「ひさしぶりに帰ってきたので寄ってみたんですが、閉まっていたので」

それを聞くと女の人は、口元にゆったりした笑みを浮かべ、ドアから出てきて門を開いた。どうぞ、と手招きをする。

「いえ、あの、すみません、新年にご迷惑かと思ったんですけど、明日帰ってしまうもので」

「どうぞ、おあがりになって」

女の人はぼくに笑いかけた。背を丸めて本を読んでいたおばあさんが笑ったところは見たことがないけれど、笑いかけられ、この人がおばあさんの娘か孫だということがすぐにわかった。どこかなつかしいその笑顔に誘われるように、ぼくは玄関へ続く庭へと足を踏み出していた。

二〇二三年度　高校国語（一回）

こぢんまりとした居間に通され、ぼくはソファに腰掛けた。ミツザワ書店とは違い、こざっぱりした部屋だった。陽のさしこむ窓に目をやると、埃がゆっくり舞うのがやけにはっきり見えた。女の人は盆に紅茶をのせて、ぼくの向かいに腰掛ける。

「突然すみません」

イもごもごとぼくは言った。女の人はぼくの前に紅茶を置く。香ばしいにおいがたちのぼる。

「あの、えーと、おばあさんはお元気ですか」

女の人は口元に笑みを浮かべたままぼくを見て、

「他界しました。去年の春です」静かな口調で言った。頬をはられたような気持ちでぼくは女の人を見た。そういえば、玄関になんの飾りもなかったことを今さらながら思い出す。

「家の者は友人の家にいっていて、ちょうど今日は留守で、私もひまだったんです」

「それであの、ミツザワ書店は」

「祖母が伏せってから、ずっと閉めています。あとを継ぎたいという者がだれもいなくて。もともと儲かるような店じゃなかったし、祖母の道楽みたいなものでしたしね。今は駅の向こうに大型書店もできて、うちが店じまいしてもみなさん困ることもないでしょう」

③何か、とてつもない失敗をしでかしたような気になった。自分は凶悪事件の加害者で、警察にいかず被害者の家に自首しにきたような。柱時計の秒針が、やけに大きく耳に響いた。

「じつはお詫びしなきゃならないことがあって今日はここまできたんです」

ぼくはうつむいたまま一気にしゃべった。十六歳の夏の日。秋のはじめの決行。はじめて本読みで夜を明かしたこと。拙い感想。三年前書きはじめた原稿。幾度も書きなおした言葉。とんでもないことになったと思った授賞式。夜襲いかかってくる不安。単行本と、それを手にして思い出したおばあさんのこと。

「本当にすみませんでした」

ぼくは財布から本の代金を取り出してソファテーブルに置き、深く頭を下げた。呆れられるのか、ののしられるか、帰れと言われるか、じっと待っていると、子どものような笑い声が聞こえてきた。驚いて顔を上げると、④女の人は腰をおりまげて笑っていた。ひとしきり笑ったあとで、話し出した。

「じつはね、あなただけじゃないの。この町に住んでいた子どもの何人かは、うちから本を持ってってると思うわよ。祖母の具合が悪くなって、それで私たち、同居するために引っ越してきたんだけど、はじめてあの店を見て、私だって驚いちゃった。持ってけ泥棒って言っているような本屋じゃない。しかも祖母はずうっと本を読んでるし。私も幾度か店番をしたことがあって、何人か、つかまえたのよ、本泥棒」女の人はまた笑い出した。「それだけじゃないの。返しにくる人も見つけたことあるの。持っていったものの、読み終えて気がとがめて、返しにきたんでしょうね。まったく、図書館じゃあるまいし。こうしてお金を持って訪ねてきてくれた人も、あなただけじゃないの。祖母が生きているあいだも、何人かいたわ。じつは数年前、これこれこういう本を盗んでしまった、って。もちろん、そんな人ばかりじゃないだろうけどね、そんな人がいたのもたしかよ。あなたみたいにね」それから女の人はふとぼくを見て、

「作家になった人というのははじめてだけれど」と思いついたように、

「本当にすみません」もう一度頭を下げると、

「見ますか、ミツザワ書店」女の人は立ち上がって手招きをした。

玄関から続く廊下の突き当りが、店と続いているらしかった。女の人は塗装の剝げた木製のドアを開け、明かりをつける。

本の持つ独特のにおい、紙とインクの埃っぽいような、甘い菓子のようなにおいがぼくを包みこみ、目の前に、あのなつかしいミツザワ書店がそのまま立ちあらわれる。

「店は閉めているけれど、そのままにしているんです。片づけるのも処分するのも面倒だというのが本音ですけど。ほとんど倉庫ですね」

女の人とともに、店内に足を踏み入れた。床から積み上げられた本、平台に無造作に積まれた本、レジ台で壁を作る本、棚にぎゅうぎゅうに押しこまれた本――。記憶と異なるのは光だけだった。ガラス戸から黄色っぽい光がさしこんでいた薄暗いミツザワ書店は、今、蛍光灯ののっぺりした明かりに照らし出されている。

「祖母は本当に本を読むのが好きな人でね。お正月なんかに集まっても、ひとりで本を読んでましたよ、子どもみたいに。読む本のジャンルもばらばら。ミステリーのこともあったし、あるとき私がのぞきこんだら、UFOは本当に存在するか、なんて本を読んでいたこともあった。祖母が祖父と結婚した理由っていうのも、祖父が本屋の跡取り息子だったからなんですって。祖父が亡くなってからは、自分の読みたい本ばかり注文して、片っ端から読んで。売り物なのにね」

女の人は積み上げられた本の表紙を、そっと撫でさすりながら言葉をつなぐ。

「私、子どものころおばあちゃんに訊いたことがあるの。本のどこがそんなにおもしろいの、って。おばあちゃん、何を訊いてるんだって顔で私を見て、『だってあんた、開くだけでどこへでも連れてってくれるものなんか、本しかないだろう』って言うんです。この町で生まれて、東京へも外国へもいったことがない、そんな祖母にとって、本っていうのは、世界への扉だったのかもしれないですよね」

二〇二三年度　高校国語（一回）

それを言うなら子どものころのぼくにとって、ミツザワ書店こそ世界への扉だったとぼくは思ったけれど、口には出さなかった。そのかわり、⑤棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそっと置いた。

「おばあちゃんは本屋じゃなくて図書館で働くべきだったわね」

「でも、それじゃ、すぐクビになっちゃいますよ。仕事を放り出して本を読み耽っちゃうんだから」思わず言うと、女の人はまた楽しそうに笑った。

本で満たされた店内をぼくはもう一度眺めまわす。埃をかぶった本は、すべて呼吸をしているように思えた。ひっそりと、時間を吸い込み、吐き出し、だれかに読まれるのをじっと待っているかのように。そのなかに混じったぼくの本は、いかにも新参者という(c)風情で、居心地悪そうだった。しかし幸福そうでもあった。作家という不釣り合いな仕事をはじめたばかりのぼくのように。

礼を言って玄関を出た。門まで見送りにきた女の人は、恥ずかしそうにうつむいて、

「いつかあそこを開放したいと思っているんです」とちいさな声で言った。「⑥　なんておこがましいけれど、この町の人が読みたい本を好き勝手に持っていって、気が向いたら返してくれるような、そういう場所を作れたらいいなって思っているんですよ」

「そうなってほしいと、じつはさっき思っていたんです。楽しみにしています」ぼくは言った。

「今日はどうもありがとうございました」女の人は頭を下げる。

「いえ、こちらこそありがとうございました」

「そうじゃなくて。本、お買いあげいただいて」

女の人はおかしそうに笑った。ついさっきぼくが出した本の代金のことを言っているのだと、わかるのに数秒かかった。すみませんと頭を下げて、ぼくも笑った。

シャッターの閉まったミツザワ書店の前を過ぎる。高く晴れた空の下、ひっそりとした商店街を歩く。数十メートル歩いてふりむくと、記憶のなかのミツザワ書店が色鮮やかに思い浮かんだ。店の前に並べられた週刊誌や漫画、埃で曇った窓ガラス。それはそのまま、未来の光景でもあるんだろう。世界に通じるちいさな扉は、近々きっと開くのだろうから。

不釣り合いでも、煮詰まっても、自分の言葉に絶望しても、それでもぼくは小説を書こう、ミツザワ書店の棚の一部を占めるくらいの小説を書こうと、⑦書き初めに向かう子どものような気分で思う。

顔を上げると、青い空に凧がひとつ浮かんでいた。

（角田光代『さがしもの』による）

問一　二重傍線部(a)「漂（って）」、(b)「高揚」、(c)「風情」、(d)「鮮（やか）」の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二　波線部ア「ちりちり」、イ「もごもご」、ウ「ぎゅうぎゅう」、エ「ばらばら」のうち、他と性質の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三　傍線部①「ミツザワ書店が近づくに連れどきどきしてくる」のはなぜか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ミツザワ書店が正月の三が日で閉まっていることを予想していたから。
イ　ミツザワ書店のおばあさんが亡くなっていることを予感していたから。
ウ　ミツザワ書店がすでになくなっているのではないかと不安だったから。
エ　ミツザワ書店から十一年前本を盗んだ日のことをふと思い出したから。

問四　空欄　②　にあてはまる言葉を自分で考えて書きなさい。

問五　傍線部③「何か、とてつもない失敗をしでかしたような気になった」とあるが、ここでいう「とてつもない失敗」とは具体的にどういうことか。説明しなさい。

問六　傍線部④「女の人は腰をおりまげて笑っていた」のはなぜか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア　ぼくの表情がまるで凶悪事件の加害者が自首した時のようにやつれていたから。
イ　ぼくが他にもよくいるミツザワ書店から本を盗んだ人の一人だと分かったから。
ウ　盗んだ本の代金を数年経ってわざわざ持ってこられるなんて初めてだったから。
エ　作家ともあろう人が町の小さな本屋から本を盗んでいたことが意外だったから。

問七　傍線部⑤「棚を見るふりをして通路を歩き、茶封筒から自分の単行本をすばやく抜き取り、塔になった本の一番上にそっと置いた」とあるが、この時のぼくの心情として適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　おばあさんにとって本が「世界への扉」だとすれば自分の本も「世界への扉」であってほしいと願う気持ち。
イ　作家になるきっかけをくれた、まさに自分にとって「世界への扉」になったミツザワ書店に感謝する気持ち。
ウ　近々ミツザワ書店が開放された時、誰かの目にとまって買ってもらえる日が来ることを心待ちにする気持ち。
エ　おばあさんが選んだミツザワ書店の本のラインナップに自分の本も仲間入りすることを誇らしく思う気持ち。

問八　空欄　⑥　にあてはまる言葉を本文中から一語で抜き出して答えなさい。

二〇二三年度　高校国語（一回）

問九　傍線部⑦「書き初めに向かう子どものような気分」とはどういう心情か。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　再び賞を受賞して人々の称賛を受けたいという心情。
イ　今までよりも上手な小説を書きたいと切に願う心情。
ウ　やらなければならないことに仕方なく取り組む心情。
エ　今後も作家として生きていく決意を新たにした心情。

問十　本文の表現や内容について述べたものとして適当でないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　「頬をはられたような」など直喩が用いられることで、その時々の登場人物の心情がわかりやすく表現されている。
イ　「ぼく」と「女の人」それぞれの回想が適宜挿入されることで、物語が重層化し作品世界に奥行きが生まれている。
ウ　過去形の文脈の中にあえて現在形が挿入されることで、その場に立ち会っているような臨場感が生み出されている。
エ　話したことが全て台詞（せりふ）の形ではなく時に要点だけが体言止めでたたみかけられることで、物語に緩急がついている。

三、次の古文を読んで、後の問いに答えなさい。

ある河のほとりに、蟻（あり）あそぶことありけり。(a)にはかに水かさまさりきて、かの蟻をさそひ流る。浮きぬ沈みぬする所に、鳩木末（こずゑ）*1よりこれを見て、「①あはれなるありさまかな。」と、木末をちと食ひ切つて河の中におとしければ、蟻これに乗つて渚（なぎさ）にあがりぬ。かかりける所に、ある人、竿（さを）のさきにとりもち*2を付けて、かの鳩をささんとす。蟻心に(b)思ふやう、「②ただ今の恩を送らふものを。」と思ひ、かの人の足にしつかと食ひつきければ、おびへあがつて、竿をかしこに投げ捨てけり。その人、そのもの*3の色や知る。しかるに、鳩これをさとりて、いづくともなく飛び去りぬ。そのごとく、人の恩を受けたらん者は、いかさまにもその報ひをせばやと思ふ心ざしを持つべし。

＊1　木末　＝　こずえ。木の枝の先の細い部分。
＊2　とりもち　＝　モチノキの樹皮などから取る、ねばりけのあるもの。小鳥や虫を捕まえるのに使う。
＊3　そのものの色や知る　＝　このいきさつを知るだろうか、いや知るはずもない。

問一　二重傍線部(a)「にはかに」、(b)「思ふやう」の本文中での読みを現代仮名づかいに直し、すべてひらがなで答えなさい。

問二　傍線部①「あはれなるありさま」とはどのようなようすか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　気の毒なようす　　イ　頑張っているようす　　ウ　楽しげなようす　　エ　危険なようす

問三　傍線部②「ただ今の恩」とはどういうことか。二十字以内で考えて答えなさい。

問四　本文の主題として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　他者から何か助けてもらいたいならば、まずは自分から助けようとしなくてはならない。
イ　どのような状況であっても決して見返りを期待して他者の力になろうとしてはいけない。
ウ　仮に他者のために力になったとしても、それを恩を受けたと感じてくれるとは限らない。
エ　他者から恩を受けたからには、何としても返そうという気持ちを持たなければならない。

問五　本文の出典である『伊曽保物語』は、室町時代後期に成立したとされる仮名草子（仮名で書かれた読みもの）である。これより後に成立した作品を次から選び、記号で答えなさい。

ア　源氏物語　　イ　雨月物語　　ウ　平家物語　　エ　竹取物語